



- 永代共養墓について
- ぶつぐら雑記ブログ
- 真言宗について
- 金剛院イベント情報
- 金剛院 建築計画
- しいなまち・みとら
- 唱えてみよう!
- 仏教一年生
- 金剛院News
- メールを送る
- こんごういんキッズ!
- たいけんしてみよう!
- まんが小坊主くん!
- 金剛院について
- おすすめリンク集
- メディアで紹介
- 東京お寺めぐり
- ぶつぐらグッズ
- 金剛院の四季
- バックナンバー
- ほほほのれしび
- ぶしぎな密教法具
- 地図・アクセス
- サイトマップ

 検索

エッセイ 仏教一年生

- 第37回 [「智の器」としてのお寺の面白さ](#)
- 第36回 [日食メガネと雨男](#)
- 第35回 [東日本大震災一周年に想うこと](#)
- 第34回 [インドマジックで被災地に笑顔を「2」](#)
- 第33回 [インドマジックで被災地に笑顔を「1」](#)
- 第31回 [井戸の話](#)
- 第30回 [五筆和尚伝説](#)
- 第29回 [縁の下をささえる人々](#)
- 第28回 [日本人、最高!](#)
- 第27回 [人間と占い](#)
- 第26回 [空海さんの謎](#)
- 第25回 [私の知らない私](#)
- 第24回 [記憶と感情](#)
- 第23回 [美人病にかかる\(後編\)](#)
- 第22回 [美人病にかかる\(前編\)](#)
- 第21回 [四億年の引きこもり](#)
- 第20回 [年齢を隠したがる人たち](#)
- 第19回 [若い時の苦労は買ってでもしろ](#)
- 第18回 [子離れの季節](#)
- 第17回 [35年目の回窓会](#)
- 第16回 [不老不死のお酒](#)
- 第15回 [アンチエイジング](#)
- 第14回 [女子力不足](#)
- 第13回 [仏のレッスン](#)
- 第12回 [母と子をつなぐ道](#)
- 第11回 [座敷わらし](#)
- 第10回 [夢のお告げ](#)
- 第9回 [犬に引かれて](#)
- 第8回 [生まれ変わり](#)
- 第7回 [お葬式の意味](#)
- 第6回 [不思議なご縁](#)
- 第5回 [生きるための勇気](#)
- 第4回 [祖母の形見](#)

仏教一年生

山田真美・著



作家、日印芸術研究所言語センター長の山田真美さんの連載です。

[プロフィール紹介](#)

第3回 ありがとうの輪

0 チェック いいね! 1 Tweet

何日か前の、雨降りの夜のこと。犬の散歩中に、道端で財布を拾いました。なにしろ私は近眼ですし、あたりは暗がりでしたから、本来ならば気づかずそのまま通り過ぎてしまうところだったのですが、たまたま立ち止まった犬の足もとに財布が落ちていたために、「おやっ?」と気づくことができたのです。

拾ってみると、それは立派な革製の財布でした。ゴミとして捨てられた物でないことを確かめるべく、念のためにチラッと中を覗いたところ、お札が入っているのが見えましたので、その足ですぐに近くの交番へ届けました。

用件を告げると、おまわりさんは慣れた様子で「それでは、お急ぎのところ恐縮ですが一緒に財布の中身を確認していただけますか」と言って椅子をすすめてくれました。犬を抱いたまま椅子に座ると、おまわりさんはおもむろに財布のチェックを始めました。中身は日本円が9万3000円と、米ドルが2ドル、それに身分証明書とたくさんカード類。ひと目見ただけで、「(落とした人は今頃さぞかし困っているだろうな)」と思わせる内容です。

おまわりさんは私の名前や生年月日、連絡先、それに財布を拾った状況などを細かく聞きながら、返事をいちいちメモしています。そうやってメモしたことを最後に改めて調書に清書するという丁寧なやり方なので、すべてが終わるまでには予想していた倍の時間がかかりました。

しかも、そうしている間にも交番にはひっきりなしに人がやって来ます。道を尋ねに来る人、「自転車のタイヤの空気が抜けたのでポンプを貸してください」とやって来る人、バイクの駐車違反で捕まった少年などで、深夜に近いというのに狭い交番は千客万来。そんな人間模様をぼんやり眺めている間に、私の脳裏には、ひとりのインド人の想い出がふっと浮かんでいました。それは、今夜の私とは反対に、財布をなくしてしまった青年のことです—。

これは今から約50年前に本当にあった話です。南インドのケララ州に、メノンという名のヒンドゥー教徒の青年が住んでいました。とびきり学業優秀で博愛的だった彼は、民衆のために尽くしたいと考えて、上級公務員試験を受けるべく単身で首都ニューデリーを目

- [第3回 ありがとうの輪](#)
- [第2回 お釈迦さまのお顔](#)
- [第1回 算数と仏教](#)
- [仏教一年生 山田真美・著](#)



指すことになりました。

南インドからニューデリーまでは、ヨーロッパの端から端まで旅をするのと変わらないほどの距離があります。しかもインドにはいくつもの言葉があって、ニューデリーではヒンディー語が、メノン青年の故郷ではマラヤラム語が公用語ですから、文化的には遠い外国へ行くのと変わりません。当時のインドでは汽車が何時間も、ときには何日も遅れることがあたりまえだったそうですから、長距離旅行の過酷さは、今の時代からは想像もできないほどだったことでしょう。

ガタンゴタンと揺れる汽車に何日も乗りつづけた末、ようやくニューデリーにたどりついた頃には、さすがのメノン青年もクタクタに疲れ果てていたに違いありません。しかも大都会の駅は人であふれ返り、田舎から出てきたばかりの青年は、なす術もなく雑踏の中でもみくちゃにされていたのです。

そのうち、ふとポケットに手をやった彼は、あることに気づいて心臓が止まりそうなほどの衝撃を受けます。そこにあるはずの財布がなくなっていたのです。

落としたのか盗まれたのか、それはわかりません。しかし電話さえ普及していないこの時代に、知る人もない大都会でいきなり一文無しになってしまった青年の嘆きと不安はどれほど大きかったことか。途方に暮れたメノン青年が呆然とたたずんでいると、「真っ青な顔をして、一体どうしたのかね」と不意に話しかけてきた人がいました。声のする方へ顔を向けると、頭にターバンを巻いたシーク教徒の老人が心配そうに見つめていました。ヒन्दゥー教徒のメノン青年にとっては見知らぬ異教徒でしたが、今や頼れるのはこの人だけです。青年はもう無我夢中で、自分は上級公務員試験を受けるためにたった今ケララから到着したばかりであること、ニューデリー駅に着くなり財布をなくしてしまい途方に暮れていることを、息もつかずに話していました。

一部始終を聞き終えると、老人は静かにうなずきました。そして、自分の財布から何枚かのルピー札を取り出しメノン青年に渡すと、そのまま黙って立ち去ろうとするではありませんか。青年はあわてて老人をひきとめました。「この御恩は決して忘れません。お借りしたものは近いうちに必ずお返しします。どうぞお名前とご住所を教えてください」。

すると老人は、海のようにおだやかな瞳でメノン青年を見つめながら、こう答えたそうです。「そのお金は、困っている君を見かねた私が勝手にあげたもの。だから、私に返してくれる必要はないのだよ。もしどうしても返したいと願うなら、いつかどこかで今の君と同じように困っている人に出会った時に、その人に返してあげなさい」。それだけ言うと、老人は何事もなかったように雑踏の中へ消えて行き、メノン青年が老人に逢うことは二度となかったといいます。

その後、無事に上級公務員試験に合格したメノン青年は、次第に頭角を現わし、やがてインド史にその名を残すほど立派な行政官になるのですが、出世してからも彼は決して偉ぶらず、誰に対しても情け深く、「自分が本当に困っていたとき無償で手を差し伸べてくれた、あのシーク教徒の老人こそが私の理想です」と、折にふれては話していたそうです。

—ふと気がつくと、書類をほぼ書き終えたらしいおまわりさんがこちらを向いて、何か言いたそうにしていました。「このお財布には、持ち主のものと思われる身分証明書が入っていましたから、持ち主はすぐに見つかると思います…。」そう言って、おまわりさんは一息つきました。「…それですね、拾った人には拾得物価額の5%から20%を請求する権利があるのですが、どうなさいますか」。

このとき私が思い出したのは、むかし東京の恵比寿で大切な腕時計を落としてしまい、99%戻って来ないだろうと思いながらも一縷の望みをかけて交番に行ったところ、すでに時計が届けられていたときのことで。あのとき時計を拾ってくれた人は、謝礼を要求するわけでも、「ありがとう」の言葉を期待するわけでもなく、ただ時計を届けるためにわざ

わざ交番に足を運んでくれたのです。あのときに感じた人情のありがたさを、忘れたことはありませんでした。

おまわりさんからの問いかけに、私は躊躇なく、「謝礼は要りません。お財布が無事に持ち主のところへ返ってくれば、それで十分です」と答えていました。するとおまわりさんは、「では請求権を放棄なさるのですね。書類の『すべての権利を放棄する』という項目に○印を付けてください」と言いながら、調書とペンをこちらへよこしました。言われたとおりに○印を付けた私は、「ご苦労様でした」というおまわりさんの声を背中に聞きながら、愛犬を連れて交番の外へ出ました。いつの間にか雨はやんで、きれいな月が雲の間に顔を出していました。

◀ [第2回 お釈迦さまのお顔](#) [第4回 祖母の形見](#) ▶

山田 真美（やまだ・まみ） プロフィール紹介

作家、日印芸術研究所言語センター長。密教学修士（高野山大学）。現在、お茶の水女子大学大学院博士課程後期在学中。1960年長野市生まれ。明治学院大学卒業後、ニュー・サウス・ウェールズ大学（豪）でマッコウクジラの回遊を研究。その後インド政府の招聘でヒンドゥー神話を調査研究。1996年より6年間ニューデリー在住。

主な著書にダライ・ラマ法王へのインタビューも収録した『死との対話』、ベストセラーとなった『ブースケとパンダの英語でスパイ大作戦』など。

訳書に第二次世界大戦の秘史を扱った『生きて虜囚の辱めを受けず』。

長年にわたりインドを日本に紹介してきた功績を認められ2007年、インド国立文学アカデミーより世界で3人目となるドクター・アーナンダ・クマラスワミ・フェローシップを受ける。

財団法人日印協会理事。日本文化デザインフォーラム、日本蜘蛛学会、宇宙作家クラブ会員。国立天文台広報普及委員会委員。



山田真美 公式ホームページ: <http://www.yamadamami.com/>

Linuxアプリに最適/IBM Linux...

x86では実現不可能な仮想化機能をはじめ オススメの理由をご紹介します！ [ibm.comへ進む](#)



[▲このページの先頭へ](#)



© 2002-2016
真言宗豊山派 金剛院

[永代供養墓 密厳霊塔](#)
[しいなまち みとら](#)
[こんごういんキッズ](#)
[メディアで紹介](#)

[ぶつぶつ雑記ブログ](#)
[唱えてみよう！](#)
[たいけんしてみよう！](#)
[東京お寺めぐり](#)
[ばばばのレシピ](#)

[真言宗について](#)
[仏教いちねんせい](#)
[まんが 小坊主くん！](#)
[ぶつ仏クイズ](#)
[ふしぎな密教法具](#)

[金剛院イベント情報](#)
[金剛院NewS](#)
[金剛院について](#)
[金剛院の四季](#)
[地図・アクセス](#)

[メールを送る](#)
[おすすめリンク集](#)
[バックナンバー](#)
[サイトマップ](#)

好きなことをして飯を食う手順

18186人が読んでいる無料メルマガ。あなたの強みを活かしたビジネスの作り方 personal-promote.comへ進む

